

西南学院百年史編纂事業の本質

— 建学の精神を継承する事業 —

塩 野 和 夫

はじめに

西南学院百年史編纂事業の発会式にあたっての講演を依頼されたが、どのような内容がふさわしいのだろうか。西南学院百年史の各論的な内容の提示よりも全体を見渡せる総論的な内容、しかも百年史の中核を貫く事柄を示すものが良いと思われる。要するに編纂事業の基本的な課題に関する講演である。

ところで、基本的とは何を意味するのか。英語で基本的とは ‘basic, fundamental, essential, elemental’ であり、日本語では「初歩的、基礎、土台、根本的、本質」を意味する。つまり、一方では「分かりやすく、基礎的」な内容であり、他方そこにおいて事業の「土台となり、根本と本質」を示す講演が求められる。

さて、歴史編纂という作業は研究分野では本質的には歴史哲学に属し、具体的には宗教史学の分野においてとりわけ「歴史的思惟とその方法」に関わって取り組まれてきた。したがって、学問的水準を保つためには歴史的思惟とその方法に則した内容が求められる。しかし、それだけでは「分かりやすく、基礎的」な内容にならない。そこで歴史的思惟とその方法に関する私の思想形成を紹介し、その中でいくつかの経験を交えたい。そうすることによって具体的に分かりやすくなるだけでなく、生きた歴史的思惟とその方法の講演となる。実存において理解された歴史理論とその方法を全体において語る時、単なる理論を越えるからである。

そうはいうものの講演内容の学問性を保つために、研究上の位置づけを明確にしなければならない。私の歴史研究は多くをドイツ宗教史学派のE. トレルチ (Ernst Troeltsch 1865-1923) に負っている。そこで、トレルチの歴史的思惟とその方法を引用し比較することによって、内容の研究的位置づけを図ってきたい¹⁾。

1 歴史認識の可能性

— 私たちは何故、また如何にして100年前の歴史的出来事を理解できるのか —

(1) 歴史認識をめぐる問い

100年前、あるいは1000年前に歴史を生きた人々、とりわけその精神性を私たちは本当に理解できるのか。もし、それが可能であるとしたら、何故また如何にして歴史上の人物あるいは彼らの出来事を認識できるのだろうか。当たり前のように理解していると思い込んでいたのは、本当に100年前の歴史なのだろうか。そもそも歴史を認識するというのはどのような事柄なのだろう。近代の歴史学ではとりわけ人間の精神性を重んじたので、精神的な活動とそれが生み出す文化を重要視した。100年前、1000年前の人々の精神性と精神的活動が生み出した文化認識に向けた問いをまず取り上げる。

(2) 詩篇第42—43篇との運命的な出会い

歴史認識をめぐる問いに関して私自身の経験から入りたい。同志社大学経済学部在籍していた3年生の後期から1年半、ある地域で学童保育のボランティア活動に従事した。それは差別と貧困に苦しみ、貧しい住環境の広がる地域であった。経済学部の卒業を目前にした1975 (昭和50) 年1月15日に、友人の軽トラックにわずかな荷物を積みその地域に転居した。それは差別に苦しむ地域に住み、地域の人々と共に地域の希望をキリスト教に求めるためであった²⁾。

幸い同志社大学神学部への編入学を許された。ところが、入学時に実施され

た身体検査に含まれていた検尿検査に引っ掛かり、検査結果は次第に悪化し6月には慢性腎炎と診断された。医師からは「下宿に留まるなら、絶対安静にするように！」と指示された。下宿で一日中天井だけを見上げていた時に、「希望の家」で私を待つ子供たちの顔が浮かんだのに行けなかった。あの時病床で神を疑いはしなかったが、神の御心は分からなかった。苦悩に悶々とする日々が続いた。詩篇42-43篇と出会い、感動に震えたのはそんなある日だった。詩人は神から引き離されていたが、苦悩のただなかでそれでも神に祈っていた。詩人の祈りは引き離されていても祈ることができる真実を教え、深い共感のうちに私を救いだした。それは歴史的体験であった。2500年の時と地域の違いを越えて、私たちは豊かに精神性を共有できる。後にあの感動は何だったのかと問い、詩篇第42-43篇をテーマに修士論文を書いた³⁾。なお6月から8月まで下宿に伏せる日が続けたが、詩篇との出会いなどがあって3ヶ月後には自宅に帰った⁴⁾。

(3) 伝承の道

そこで、詩篇第42-43篇研究の結果である。詩篇第42-43篇の研究はこの詩篇を「詩1」「詩2」「編集者による付加」に分類し、それらが編集者によって最終的にまとめられた道筋を明らかにした。「詩1」「詩2」の著者と編集者は生きた時代も場所も違った。しかし、苦悩という共通した経験がもたらした伝承の道を通して、編集者は詩篇第42-43篇を成立させた。だが、伝承の道はそれで終わらなかった。1975（昭和50）年夏、私は詩篇第42-43篇に感動したが、あの感動は何であったのか。あの時、神をめぐる苦悩によって詩人の苦悩を追体験していた。この追体験が詩人たちの伝承の道に私を立たせ、共感性を持って詩篇42-43篇を深く理解させていたのである。

このような真実はなぜ可能なのか。そこで、歴史認識に関する命題1である。

「命題1 個人の歴史認識に関する真実」

私たちは歴史を認識し、歴史を生きた人々の精神的経験を追体験できる。それは人間が歴史性を刻印された歴史的存在であり、そのような者として共感性を媒介として歴史を追体験しつつ認識できるからである。

(4) 歴史的事物を認識する可能性

詩篇研究から歴史認識を検討したが、次にトレルチにおける歴史認識を見ておきたい。トレルチは類比 (die Analogie) 概念を歴史認識の可能性に関する原理であるとして、「錯誤・混乱・でっちあげ・虚偽・党派心」などの経験が歴史認識を可能にするという⁵⁾。ここでトレルチは日常の否定的な経験を取り上げ、それらも類比として用いるならば歴史認識の可能性を持つとする。要するに人間は歴史的存在であり、成功と失敗・喜びと悲しみなど日ごとの経験を通して歴史的認識を可能にしている。そうだとしたら、西南学院の歴史は何によってよりふさわしく認識されるのか。

「命題1に導かれた西南学院百年史の認識に関する示唆」

西南学院百年史は、学院における日常の教育現場における出来事（チャペル・授業・クラブ活動・生徒の指導など）とそのため心を砕く教職員によって認識される。なぜなら、教育現場で打ち込む教職員の日ごとの経験こそが100年前の教育現場との類比関係を豊かに持ち認識させるからである。

ところで、「1 歴史認識の可能性—私たちは何故、また如何にして100年前の歴史的出来事を理解できるのか—」が扱った歴史認識は、「個人による歴史認識」という性格と限界を持つ。したがって、西南学院百年史編纂事業はこの限界を越えていかなければならない。

2 共同体における歴史認識

— 西南学院百年史編纂事業の基本的性格 —

(1) 個人から共同体の歴史認識へ

人間は個的存在であると共にさまざまな共同体に所属し、共同体を形成する。西南学院は設立以来一貫して共同体という性格を持つ。西南学院百年史編纂事業にとって、この「共同体という性格」は根本的な特色の一つとなる。しかも、この性格は百年史編纂事業に歴史認識に関する重要な問いを投げかけている。人間は歴史的存在として歴史を認識する可能性を持っていた。同様に西南学院は共同体という性格を持つ歴史的存在であり、この特色は共同体における歴史認識を要請しているのではないか。そうだとしたら、共同体における歴史認識とはどのような事柄であり、如何にしてそれは可能なのか。そこで、歴史認識に関わるもう一つの経験を紹介したい。

(2) 会員による総力を結集した教会史

かつて2教会の歴史編纂事業に詩篇第42-43篇研究とは全く違った雰囲気のもとで携わった経験がある。あの違いは何であったのか。1981（昭和56）年4月に日本基督教団宇和島信愛教会と伊予吉田教会の主任担任教師として赴任し、8年間在籍した。年を重ねるごとに教会の仕事は増え、たとえば火曜日・水曜日・木曜日・土曜日の午後は宇和島の各方面への訪問に出かけ、金曜日には伊予吉田で午前中は教会に滞在し午後は夜9時過ぎまで訪問に歩いた。そのような中で1984（昭和59）年から両教会はそれぞれに教会史編纂委員会を組織した。以来、教会の仕事を終えた午後8時頃以降は毎晩のように牧師室にこもり、教会史編纂の仕事に没頭した。こうして順次、2教会の歴史を書きあげることができた⁶⁾。

「あとがき」（『日本キリスト教団 伊予吉田教会90年史』）は教会史編纂事業が「会員の総力を結集できた」作業だったとしている⁷⁾。確かに、毎晩のように私は様々な史料と格闘し、教会史を構想し、執筆するために莫大な時間を

費やした。しかし、一連の作業は個人の研究とは明らかに違った雰囲気のもとにあった。あの4年間、すべての会員がそれぞれに知恵と力を出しあい教会史編纂のために取り組んでいた。その上で、月に一度それぞれの教会が教会史編纂委員会を開き、新しい発見やアイデアを持ち寄って集まった。委員会の協議を重ねる中で、設立期における教会員の喜びと苦勞、戦時体制下に教会を支え続けた人々の苦闘と希望、戦後の盛んな時期における教会形成、ようやく安定した近年における教会活動など、折々の時代を生きた教会とそれを担った先達の労苦を私たちは深い共感を持って共に受け止めた⁸⁾。

「命題2 共同体における歴史認識」

4年間の編纂事業によって教会は歴史的感覚の鋭い共同体となった。共同体は歴史編纂事業などを通して、いつの時代にあっても個的存在ではなく歴史的共同体である真実を認識し、その歴史を受けとめ、次の時代に継承していく意思を共有する。

(3) 共同体性を帯びた「建学の精神」

ここで、西南学院における共同体性について考察する。C. K. ドージャーは1933（昭和8）年5月31日に“Tell Seinan to be true to Christ.”と遺訓を残し旅立った。1年後（1934年6月20日）に発行された『ドージャー院長の面影』⁹⁾は遺訓について興味深い記述をしている。まず表紙には遺訓そのものを“Tell Seinan to be true to Christ.”と記し、見開きの頁には「西南よ 基督に真実なれ」という書を入れている。さらに水町義夫は「巻頭に序す」で「西南よ、キリストに忠実なれ」としている。しかし、どこにも建学の精神という言葉は見当たらない。

このようにドージャーの遺訓を記す3通りの表現は、遺訓が西南学院の建学の精神とされていく過程での1コマを示している。この過程はまた学院の共同体性を帯びることによって建学の精神が成り立った事実をも語っている。ドージャーは遺訓を残し旅立ったが、あの時点で遺訓は建学の精神ではなかった。

つまり、遺訓は建学の精神の必要条件ではあっても、十分条件ではなかった。1年後に学院関係者は遺訓に注目した。しかしなお、遺訓を建学の精神とする言葉はない。また、“be true”を「真実なれ」とする立場と「忠実なれ」とする者に分かれたように、遺訓の翻訳も確定していなかった。だがやがて西南学院は遺訓の訳語を確定し、これを建学の精神とする。

「命題2 に導かれた建学の精神の共同体的性格」

一連の経過は建学の精神が西南学院の共同体性を帯びた概念である事実を語っている。要するに、西南学院の共同体性において建学の精神は成り立っているのもあって、建学の精神を成立させる根拠は学院の共同体性にある。

それにしてもなぜ、わずか1年余りの間にドージャーの遺訓は西南学院の建学の精神とされていったのか。ここに私学西南学院の根本的事情があった。私学は明確な教育理念のもとに立ち、それを社会に表明して存在する共同体である。この事情がドージャーの遺訓を西南学院建学の精神としたのである。なお、ドージャーは西南学院設立当初から建学の精神に表明された立場を堅持して学院の教育に従事していた。この事実を西南学院は正しく認識し、百年史において記憶すべきであろう。

(4) 歴史を生き西南学院を導いた建学の精神

設立当初からドージャーが重んじた教育の精神を彼は遺訓として残したが、西南学院は1930年代半ばにこれを建学の精神とし、それ以来80年に近い歴史を生き抜いてきた。

「命題3 建学の精神と西南学院史」

建学の精神は一貫して学院の礎として自覚され、進むべき方向性を示す指針として継承されてきた。この事実を西南学院が建学の精神において折々に自己を理解し、教職員は建学の精神を具体化する働き手として教育活動に従事した真実を意味している。

命題3は西南学院が時に右に揺れ、時に左に揺れた歴史を否定しない。むしろ、さまざまに動揺した歴史においてこそ、そこにおいても維持された建学の精神は意味を持つ。このようにして学院の歴史は重ねられてきた。そこにおいて建学の精神は豊かな成果を生み出し、学院の歴史的実実を实らせてきた。

「命題3に導かれた西南学院の個性と独自性」

建学の精神によってもたらされた歴史的成果、これこそが私学西南学院に譲ることのできないあるいは他の何物にも代えることのできない個性と独自性をもたらしている。

ここで、精神性が持つもう一つの側面に触れておきたい。精神性は時と所を越えて継承され、しかも継承される過程において時代や地域社会の要請を受けさまざまな文化的表現を採るという性格を持つ。

「命題4 建学の精神とその継承」

建学の精神も時と所を越えて継承される精神性に認められる特色を示してきた。

「命題4に導かれた西南学院史の読み方」

たとえば、第6代院長 E. B. ドージャーは建学の精神を「神と人にと誠と愛を」と表現して、学生の留学を促進するため海外の大学との協定校制度の設立を模索した。あるいは第11代院長 L. K. シートは建学の精神を「4つの L-Life, Love, Light, Liberty—生命, 聖愛, 光明, 自由」と言い換えて、4L教育を推進した。これらは建学の精神の展開という性格を持つ。

3 資料と建学の精神

(1) 資料との格闘

ここから、歴史編纂事業の生命線となる資料との取り組みについて述べていく。かつて2冊の教会史をまとめるため4年間の歳月を必要としたが、初めの1年間は資料の収集・分類・内容の検討に費やした。無味乾燥とも思われる資料を繰り返し読み続けた1年間は、文字通り資料と格闘した日々であった¹⁰⁾。しかし、資料と向き合う作業こそ歴史編纂事業のなくてはならない基礎作業である事実がやがて明らかになる。

「命題5 資料と歴史編纂事業」

資料をひたすら読み続けるなかからやがて、歴史を生きた人々の息遣いが聞こえるようになり、彼らの喜びや悲しみに共感しつつ、歴史を形成した彼らの意図と忍耐が分かり、彼らと対話さえできるようになる。

歴史を形成した人々との対話、これこそ歴史編纂作業の本質である。だから、歴史編纂事業に一次史料の収集とそれを検討する時間を惜しんではならない。

いくつか、キリスト教関係者の歴史編纂に関連する文献を紹介しておこう。

土肥昭夫『各個教会史をどう書くか—資料収集から叙述まで—』¹¹⁾

教会史の編纂にあたって資料の収集から叙述にいたる作業内容を事細かに指摘している。その上で、筆者が執筆した『京のある教会の歩み—京南・京北教会史—』を具体的事例として紹介している。この教会史は時代と地域社会の中に生きた教会を描いている。

神戸女学院史料室『学院史料』Vol.23¹²⁾

神戸女学院の学院史料室は地道に女学院関係資料の研究に取り組み、その成果を『学院史料』に公表している。これらの研究成果が折々に出版される学院

史関連文献に生かされている。西南学院においてもこのように堅実な資料研究が求められている。

塩野和夫「西南学院史の資料(1)」¹³⁾

西南学院が保存する学院史関連史料の全体像を明らかにしようとした試みである。完成したものではないが、およその全体像を知ることができる。資料の概要を知る上で、学院史研究には欠かせない。

ところで、西南学院においてこれまで学院史編纂事業はどのように取り組まれてきたのか。保存された資料から学院史編纂事業の概要を捉えようとした論文がある。

塩野和夫「西南学院史史料研究(1) 学院史編集室史」¹⁴⁾

「学院史編集室史」によると、「西南学院50年史」編纂作業、「西南学院60年史」編纂作業、そして『西南学院70年史』出版事業において、学院関係者はそれぞれ誠実に作業に取り組み、成果を残している。それにもかかわらず、『70年史』の出版を含めて、いくつもの課題を残したままである。

「命題5に導かれた西南学院百年史編纂事業の基本的課題」

たとえば、「村上寅次『編集後記』(『西南学院70年史 下巻』)は70年史においてもなお、執筆者と学院関係者との困難な課題が残っていたことを率直に書いている。問題の根本にあるものは、西南学院史に対する基本的な理解であると思われる。そもそもキリスト教系学校とは何なのか。キリスト教系学校の歴史を、それにふさわしく表現するために何が必要なのか。このような西南学院史に関する基本的な共通理解がまず必要であったと考えられる。」¹⁵⁾

これまでの歴史編纂事業において持ちこされてきた諸課題は、100年史編纂事業において何よりもまず克服されなければならない課題に違いない。

(2) 史料批判と歴史に刻印された精神性

トレルチが近代における歴史的方法としてまず取り上げているのが「歴史批評に対する原理的な習熟」であり、それは「歴史的領域における蓋然性の判断」であり、「個々の伝承に対してそれぞれにふさわしい蓋然性の程度が測られねばならない」とする¹⁶⁾。要するに、歴史的研究はそれぞれの資料がもつ歴史的な確かさの程度を明らかにする作業が基礎をなす。あらゆる歴史研究はこの基礎作業の上に築かれていくのであるから、およそ歴史を研究する者は歴史的蓋然性を検討した研究成果を尊重し、それに対して謙虚であらねばならない。これが歴史研究における史料批判である。今日の歴史研究において史料批判は広く用いられ、認められている。そこで、百年史編纂事業においても資料の確かさを直ちに承認するのではなく、史料の蓋然性や相互関係などを慎重に考慮した上で資料が持つ確かさや特徴をおさえていく必要がある。

資料の検討に際して、史料批判と並んであるいはそれ以上に重要な判断基準がある。それは歴史そのものに内在する判断基準である。歴史は自然と対立する概念である。人間の手が加わっていない自然に人間が手を入れ、手を加え続ける時にそこに文化が生まれ歴史が誕生する。したがって、人間の日常生活や道や橋など人間の造作物、言語や文化、人間の生き方や信仰などは歴史を構成する。ところで、人間が歴史を形成する時、その活動は大きく目に見える文化と目には見えない精神性に区分できる。人間の精神性は目には見えないが、文化の根源にあってあらゆる文化を創造するがゆえにそこに刻印されている。近代の歴史学においては歴史形成に精神性がさまざまに果たした役割が尊重されている。このことは歴史の見方や叙述方法にも影響を与えている。

「命題6 歴史の判断基準としての精神性」

歴史形成にあたって多大に寄与した精神性は歴史編纂事業において重要な判断基準となる。

(3) 資料と建学の精神

歴史における精神性がそうであるように、建学の精神も教育現場において目に見えない。また、あらゆる文化に精神性が刻印されているように、西南学院の歴史にはいつの時期にあっても建学の精神が刻みこまれている。

ところで、歴史に刻まれた精神性はなぜ歴史的物事に対する判断基準となるのか。すぐれて主体的性格を帯びた特質ではあるが、人間の精神性には軽さや重さ、あるいは浅さや深さがある。したがって、精神性の表現であり精神性の刻印された文化にも、軽く精神性が刻印された文化もあればしっかりと深く刻み込まれたものもある。歴史的にはより深く精神性を刻印された物事が歴史性を豊かに持っているとは判断できる。このようにして、命題6は歴史研究に適用されていく。

「命題6に導かれた西南学院史の判断基準としての建学の精神」

歴史における精神性の刻印がそうであるように、西南学院史において建学の精神が深く刻み込まれた出来事が学院の歴史において重要性を持った出来事だと判断できる。折々の時期に建学の精神をしっかりと刻みこまれた出来事が学院史の中心におかれるにふさわしい。このような性格を備えた一連の出来事が西南学院百年史を貫き、百年史の中核となる。

(4) 歴史との対話

歴史叙述における枠組みについて述べる。歴史編纂事業は歴史との対話によって進められる。しかし、対話の仕方に陥りがちな注意すべき課題がある。その扱い方によって歴史は生きもすれば死にもする。間違っても歴史を窒息させてはならない。

トレルチはA.リチュル (Albrecht Ritschl 1822-1889) から歴史の持つ豊かな可能性を学んだが、やがて学問的立場において彼から離れていった事実は広く知られている。トレルチによるとリチュルの研究は歴史的思惟において不徹底であり、歴史で学問的成果を上げながらその枠組みにキリスト教の教理を用い

ている。そのためにいびつな歴史となってしまった¹⁷⁾。歴史は生きものである。だから、歴史叙述の原則は生きものである歴史を生かす方法を求めることである。このことは、歴史研究にそれはつねに歴史への発見の旅であるという性格を与える。

「命題7 歴史と歴史的概念」

歴史を旅して発見された歴史的概念だけが歴史を生かし歴史を理解させる。間違っても、歴史以外から概念を取り出し、歴史に枠をはめてはならない。

4 多彩な関係の中にあった西南学院

(1) 建学の精神と関連性

資料を丹念に読み、建学の精神を主要な判断基準として西南学院百年史との対話を共同作業において重ねることによって、学院史の概要は把握できるであろう。しかし、それは概要であって、多様で豊かな内容を持った西南学院百年史そのものではありえない。そこで、近代の歴史学が「あらゆる歴史的事象の間に生ずる関連性」の解明を要請している点に注目したい¹⁸⁾。ところで、そもそも歴史的事象の間に存在する関連性とはどのような事柄なのか。

(2) トレルチ『キリスト教会の社会教説』における2系列の共同体概念

さまざまな関連性においてキリスト教史を叙述した業績によって、トレルチはキリスト教史に新たな可能性を拓いた。それはどのような手法によるのか、『キリスト教会の社会教説』¹⁹⁾で見ておこう。トレルチはキリスト教会を2系列に分類される共同体概念によって叙述している。第1系列に属する共同体概念は‘Kirche (教会)’と‘Sekte (分派)’である。この概念を用いる時、「キリスト教会の内部に自分の思惟を持ち込み、そこからキリスト教会の把握・分析・叙述」に努めている。第2系列に属する概念は‘Gruppe (集団)’、‘Gemeinschaft (共同体)’、‘Gemeinde (会衆)’である。この概念を用いて「キリスト

教会を他の社会的な共同体とのかかわりの中に位置づけようとし、「キリスト教史と一般史に相互浸透性を与えながら、キリスト教史の叙述を進めている」²⁰⁾。

「命題8 関連におかれる歴史的事象」

トレルチによると、歴史的事象に「全く孤立した事柄」はありえず、「必ず幾重もの関わりあい」がある。そこで、トレルチはキリスト教史をさまざまな関わりの中におかれている歴史として叙述した。この方法は今日では広く採用されており、トレルチを新たな可能性をキリスト教史研究にもたらした開拓者としている。

(3) 建学の精神を担う教職員、育ちゆく生徒・学生

「命題8に導かれた西南学院史の分析」

建学の精神がもっていた幾重もの関わりあいは、西南学院史においては学院内における関係と学院と学外との関係に分けることができる。

「命題8に導かれた西南学院史の分析」にしたがって、まず学院内におけるいくつかの関わりについて考察する。ここでは歴代院長や学長・校長など、折々の時期に学院を担い指導した人物と建学の精神との関わりが取り上げられる。彼らの教育思想および学院の経営や課題への対応を順次分析し、検討しなければならない。一連の作業によって、各時期における西南学院全体の構造や教育環境の特色が浮き彫りになる。これは西南学院百年史の骨格となる。その際、西南学院の転換期や大きな課題を持った時期に責任を負った人物の教育思想や方針がとりわけ重要になる。なお、従来のキリスト教系学校史ではこれらの側面が重視されてきた。それは確かに骨格を形成しているが、骨格に過ぎないともいえる。

各時期における西南学院の教育環境が明らかになれば、それぞれの時期に具体的にどのような教育活動が実施されていたかを検討しなければならない。こ

ここでは建学の精神を担い、教育活動に従事した教職員が主たる検討対象になる。ところで、西南学院の目的は言うまでもなく教育事業である。だから、教育事業を担った教職員と彼らの仕事ぶりは西南学院百年史における一方の主役になる。

「命題9 個性性と総体性」

近代の歴史学においては個性性と総体性の関連が重視される。要するに、個別具体的な事例を生き生きと描き出しながら、その叙述によって総体性を表現するという手法である。

「命題9に導かれた西南学院百年史叙述への示唆」

西南学院史においても各時期にその時の教育活動の様子をよく表現している教職員を数名ずつ取り上げ、彼らを具体的に生き生きと描き出す叙述方法が導かれる。彼らを叙述することによって当時の西南学院全体が描き出されるだけでなく、具体的な叙述によって学院史は物語性を持ち読者に訴えかける力を持つようになる。各学校におけるチャペルやクラス、課外活動などの様子を具体的に取り上げることも、学院の様子を叙述する上で有効である。

さらに生徒学生の視点が必要不可欠である。西南学院の教育活動の場を現出しているのはいつの時代においても教職員と生徒学生である。学生の視点が欠落すると、生きた教育現場を叙述することはできない。さらに言うところ、育ちゆく彼らこそ建学の精神を掲げ教育事業にあたる西南学院の目的なのである。彼らに対して西南学院の教育は何であったのか。キリスト教系学校史はほとんどがこの点に触れていない。学生の叙述には確かにいくつもの困難が伴うであろう。しかし、彼らは教育現場の一方の主役であるだけでなく、いつの時代にも彼らに対する教育に西南学院のすべてがかかかっており、困難を克服して西南学院百年史には学院における学生を登場させなければならない。そこで各時期に学生の立場からチャペルの様子や彼らの意見を加えていく。あるいはクラスや課外

活動、彼らの日常生活なども生徒学生の立場から叙述する。紆余曲折を経て西南学院で育った彼らの成長過程を含めることで、西南学院百年史は豊かな教育現場を再現させるであろう。

このようにして、いくつかの観点から西南学院内部における建学の精神との関わりを分析し叙述することによって、各時期の学院各学校における教育現場が叙述される。

(4) 地域社会を生きた西南学院

〔命題10 外的要因と西南学院との重層的な関わり〕

政治・経済・福岡市近辺の交通事情・若者文化そして地域社会など様々な外部要因は重層的に西南学院と関わり、教育活動の場を形成してそれに影響を与えた。

命題10が指摘する外的要因を西南学院百年史執筆にあたって、すべて同等に取り上げることはできない。そこで、西南学院史に与えた影響の質と量を考慮し、学院史に大きな影響を与えた外部要因や独自性を与えた要因を取り出す。ところで、各外的要因の重要性は時期において異なる。それらを総合的に判断した上で、これら外的要因との関係において西南学院百年史は叙述されることが望ましい。

従来のキリスト教系学校史が等しく取り上げているのは日本の政治動向である。100年の歴史において日本の政治は大きく変化した。その度に西南学院は時代の変化に対応して教育方針を変えた。たとえば、創立当初を風靡した大正デモクラシーから戦時体制への政治状況の変化である。あの時に西南学院は政府の指導（直接には文部省）に従って教育活動を行った。政治の動向は西南学院の隅々に影響したが、とりわけ学院史の骨格に痕跡を残した。それは西南学院百年史において記録されなければならない。

福岡都市圏における交通事情と西南学院にも意外に深い関係がある。交通事

情の変化は生徒学生の通学範囲に影響したからである。設立当初の生徒はおそらく福岡市、それも福岡市中心部から西側の地域を生活圏としていたのではないか。戦後に著しい交通事情の発展によって、通学圏は福岡県下全域に広がり、さらに山口県・佐賀県・熊本県にまで拡大する。他方、広く九州全域・中国・四国から学生は下宿するようになる。このような通学圏の拡大や下宿生の存在は学生生活に大きく影響したであろう。何らかの形で西南学院百年史に書き残しておきたい事柄である。

次いで、経済状況の変化である。経済生活は西南学院の隅々にまで影響している。まず、授業料である。授業料は西南学院に通うことのできる生徒学生層を決定する。そこで、各学校の授業料はどのように変化し、この変化が学院に通う学生にどのような影響を与えたのか。さらに経済状況は学生生活に直接影響する。そこで、折々の時期に経済状況によって規定された学生生活（服装や所持品・食事の内容・学生同士の交流内容・勉強の仕方・購入図書など）はどのようなものであり、その後どのように変化していったのか。各時期における生徒学生の生活に関する具体的な叙述は、西南学院百年史の内容に具体性と親しみを与える。

さまざまな外部要因の中で西南学院百年史に個性と具体性を与える要因として地域社会を挙げておきたい。具体的には西南学院が立地している西新を中心とした福岡市西部地域である。生徒学生の生活は学校においてだけでなく、地域社会においても営まれているからである。百道海岸で泳いだ思い出や水泳後に飲んだ冷やし飴、放課後に友達と食べた饅頭の味と話し合った内容、部活後にクラブの仲間と通ったラーメン屋のおばちゃんとの会話やラーメンの味、喫茶店で時を忘れて話し合ったひと時、これらは学生生活に彩りを添える。したがって、このような一面も西南学院在学中の重要な生活の一部であって、書き残す価値を有する。地域社会は意外に深く生徒学生の生活に影響し、西南学院百年史に個性を添えているのである。

終わりに

講演が「編纂事業の基本的な課題に関する講演」（はじめに）となっていたかどうかは聴衆者に判断いただきたい。最後に「西南学院百年史編纂事業の本質―建学の精神を継承する事業―」に関して、一つだけ加えておきたい。

1996（平成8）年度後期（受講者20名弱）と1997（平成9）年度後期（受講者40名程度）、2度にわたってキリスト教人間学Bで「西南学院史」を扱った時の印象である。クラスの概要は以下の通りである。

- 1 西南学院史を考える（総論）
- 2 創設期の教育者
- 3 継承期の教育者
- 4 これからの西南学院を語る

なお、講義を元にして1997（平成9）年7月23日～24日に職員夏期研修会で講演した。

全体テーマ「西南学院の教育者群像―「与える幸い」を継承した人々―」

第1回テーマ「西南学院の教育者群像とその時期（総論）」

第2回テーマ「西南学院の教育者群像（各論）」

あのキリスト教人間学Bのクラスには忘れがたい印象がある。あの時、なぜか受講者は熱心に講義に耳を傾け、ディスカッションも白熱した。「なぜ、このクラスを採ったのか」という問いに、多くの学生は「4年間学んだ西南学院についてもっと知っておきたかったから」と答えた。事実、講義もディスカッションも熱のこもったものとなった。白熱する講義の中で感じたのは、学生の西南学院に対する意外に強い帰属意識である。だから、彼らに講義し学生とディスカッションをした時に、彼らと私は西南学院史に継承されてきた教育

精神史を共有していると実感した。また、西南学院史には教育事業に関する豊かな宝物がいっぱい埋もれていて、発掘されるのを待っていると感じた。

そこで、私がイメージする西南学院百年史編纂事業の本質とは、あの講義で実感した教育に情熱を込めた人々すなわち西南学院の宝物の発掘なのである。西南学院百年史にいっぱい埋もれてしまっている宝物を共に発掘し、発見して喜びを共にする。誠実に教育に打ち込んだ人々の掛け替えのない業績が西南学院史には多くあると確信している。しかも、西南学院百年史編纂事業を共に担い数々の発見によって喜びを共にする時、その喜びにおいて建学の精神は継承されており、明日の西南学院に建学の精神は引き渡されていく。したがって、西南学院百年史編纂事業の本質は建学の精神を継承する事業だと言えるのである。

注

西南学院は「百年史編纂の部会発足会及び記念講演」を2011（平成23）年5月13日に大学チャペルで行った。本稿はその時の内容を元にして若干補足したものであり、講演会の様子を残すように試みた。論文でありながら随所に講演会風の体裁を残したのはそのためである。

1) トレルチの歴史的思惟とその方法に関しては、以下を参照。

「トレルチ初期の歴史的思惟—歴史的思惟とリチュル的なもの」（塩野和夫『日本組合基督教会史研究序説』123-128頁）

2) 地域には最も住環境の劣悪なスラムが何箇所かあった。河原にあって当時0番地と呼ばれていたスラムもその一つであった。地域での生活を初めて数日後から毎朝0番地の前に行き、祈った。祈り始めて3日目だったのだろうか、一人のおばさんが来られて「お兄ちゃん寒いやろ、あたっていきいな」と小さな焚火をたいて下さった。それは病気に倒れるまで毎日続いた。「君は天使を見たか」はその時の経験を記している。

「君は天使を見たか」（塩野和夫『一人の人間に』1-6頁）

3) 「詩篇第42-43篇研究」（『国際文化論集』第24巻第2号、147-211頁）

4) 詩篇42-43篇との出会いなどがあって、病床に伏してから3ヶ月後に自宅に帰ることができた。あの時、苦悩に変えて生かされている幸に私の魂は満たされていた。その感動を「この確かな生を」に表現した。

「この確かな生を」(塩野和夫『一人の人間に』40-46頁)

5) 「トレルチ初期の歴史的思维—歴史的思维とリチュル的なもの」(塩野和夫『日本組合基督教会史研究序説』127頁)

6) 次の2冊である。

塩野和夫編『日本キリスト教団 伊予吉田教会90年史』1987年

宇和島信愛教会創立百周年委員会編『宇和島信愛教会百年史』1988年

なお、「あとがき」(塩野和夫編『日本キリスト教団 伊予吉田教会90年史』145-148頁)が教会史編纂作業の様子をよく伝えている。

7) 「『伊予吉田教会90年史』作成ですばらしかったことは、会員の総力を結集できたことです。」(塩野和夫編『日本キリスト教団 伊予吉田教会90年史』147頁)

8) 「教会史執筆の過程で、一体どれだけの時間を教会史に登場してくる人たちと真向かいになったか分かりません。真向かいになる中で、吉田の町に対する深まってくことを私は覚えていました。いつ倒れるとも分からない小さな教会の歴史が人事ではなくなっていました。愛とは一人と真向かいになることから生じてくる人間の真実でした。今にして、これで良かったのだと思います。貴重な時間を注ぎ、己を注ぎ、愛を深めていくに優ることはなかったのだと今にして思います。」(塩野和夫編、前掲書、146頁)

「教会の歴史に即することは、生きた教会の歴史を受け止め表現することです。教会を生み、立て、活動してきた根本動機に共鳴しながら、共鳴する心で表現することです。そのように教会の歴史に即して執筆される時、教会史は教会の信仰の歴史を引き受け、明日の教会に引き継いでいく貴重な資料となります。およそ、教会史と呼ばれる書物は生きた教会の歴史を継承させる重要な手段です。」(塩野和夫編、前掲書、147頁)

9) 『ドージャー院長の面影』ドージャー先生追憶記念事業出版部、1934年

10) 「こつこつと作業を進め、『伊予吉田教会90年史』の完成を見るのにまる4年の歳月を要しました。大ざっぱに言って、4年の歳月は3期に区分できます。1984年4月から教会保存資料の調査にあたったのが第1期です。第1期には1年かけて教会保存資料を分類し、内容を調査し、資料として整理しました。無牧や兼牧の時代が長く、資料が整理されることのない教会ですから、資料はごくわずかしが残されていませんでした。その上、比較的資料の保存されている時代があるかと思えば、資料がなく見当のつかない時代に途方に暮れたこともありました。それでも、会員原簿や会計資料から貴重な手掛かりを得ることができました。」(塩野和夫編『日本キリスト教団 伊予吉田教会90年史』145頁)

11) 土肥昭夫『各個教会史をどう書くか—資料収集から叙述まで—』教文館、2010年

12) 神戸女学院史料室編『学院史料』Vol.23, 2009年

13) 塩野和夫「西南学院の資料(1)」(西南学院百年史編纂諮問委員会編『西南学院史紀要』Vol.1, 2006, 60-77頁)

- 14) 塩野和夫「西南学院史史料研究(1) 学院史編集室史」(西南学院百年史編纂諮問委員会編『西南学院史紀要』Vol.1, 2006, 16-39頁)
- 15) 塩野和夫, 前掲書, 38頁
- 16) 塩野和夫「トレルチ初期の歴史的思惟—歴史的思惟とリチュル的なもの」(『日本組合基督教会史研究序説』127頁)
- 17) 塩野和夫, 前掲書, 124-125頁
- 18) 塩野和夫, 前掲書, 127頁
- 19) Troeltsch, Ernst, *Die Soziallehren der christlichen Kirchen und Gruppen*. G. S. I., Tübingen, 1912.
- 20) 塩野和夫「キリスト教会の認識と共同体概念」(『日本組合基督教会史研究序説』151-155頁)